

称呼類似の再検討（3）

第2章 特殊拍の加入と交替



会員 須賀 総夫

要約

長音すなわち音節を構成する母音を長く引いた、いわゆる「引き音」、促音すなわち「つまる音」、および撥音すなわち「はねる音」は、独立して音節を構成する要素ではないが、称呼の中にしばしば登場して、いろいろを与えている。これらは1モーラ分の長さを占めるので、「モーラ音素」という名称で一括して呼ぶこともあるが、ここでは便宜的に慣用されている、「特殊拍」という名称を使う。本稿では、特殊拍の有無および交替が、称呼の類否判断にどのような影響を及ぼすかについて、審決を調べたデータにもとづいて検討する。

まず、特殊拍の加入により称呼のモーラ数が増加したとき、それが称呼の類否にどのような影響を与えるか、という問題を取り扱う。前2報の「モーラの増加」は、対象をV音節（母音だけの音節）およびCV音節（子音+母音の音節）に限っていたが、モーラの増加は、これらのほか、特殊拍の加入によっても引き起こされる。長音の加入は、語中への挿入と語尾への付加の二つの場合がある。促音の加入は語中への挿入だけであるが、撥音の加入は、長音と同様に、語中への挿入と語尾への付加がある。

つぎに、特殊拍の交替（モーラ数は増加しない）が称呼の類否判断に及ぼす影響を検討する。語中で生じる長音と促音の交替、語中および語尾であり得る長音と撥音の交替、そして語中で起こる促音と撥音の交替、の3種の場合である。

目次

1. 「特殊拍」とは
2. 長音の加入
3. 促音の加入
4. 撥音の加入
5. 特殊拍の交替
6. 長音と促音の交替
7. 長音と撥音の交替
8. 促音と撥音の交替
9. この章のまとめ

延ばされた部分をさしている。前者はそれと対をなす短音に対する言い方。後者はその音韻論的解釈において大きく二つに分かれる。すなわち、引きのばされた部分は五種の異なる母音なので、そのまま五種とみなす立場があり、それに対して、具体的な母音の相違にかかわらず、引きのばすところに共通の弁別の特徴があると認めて、長音を単一の音韻論的単位とみなす立場がある。あとの場合には引き音節という呼称も用いられる。それに基づけば、長音は促音・撥音とともにモーラ音素の一つとして位置づけられることになる。」

本報が後者の立場をとっていることは、要約の記述から明らかであろう。

「促音：

つまる音とも。調音ないし聴覚的印象にもとづく命名。「はっきり」「あっさり」「もっとも」「いっぱい」などのように、現代かなづかいでは小さい「っ」「ッ」の仮名で表記される。語頭に立つことがなく、また他の音素と結合せずにそれ自体で独立のモーラを形成する点において、撥音・長音と共通の音韻論的特徴をもつところから、それらとともにモーラ音素と総称され

1. 「特殊拍」とは

要約に記したように、「特殊拍」とは、「長音」、「促音」および「撥音」を一括して呼ぶ語であるが、辞書では、それぞれつぎのように定義されている。（国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版 昭和55年）

「長音：

二つのモーラに相当する単音節の全体、あるいはその引き延ばされた一モーラ相当の母音の部分。たとえば、「おじさん [odzisan]」の [dʒi] に対する「おじいさん [odʒi:san]」の [dʒi:] の音節あるいは [i:] の引き

表3-1(2/2)における「トロット×トロット」(4→5)について審決(不服2004-12220)は、「中間に長音『ー』の有無の差異を有するにすぎず、称呼近似だが」と認めたものの、「外観、称呼及び観念を総合的に考察すると、印象、記憶は著しく相違し、誤認混同を来たすおそれのない非類似商標」と結論している。

表3-1にみるように、ある称呼に長音が加入したとき、しばしば非類似になるが、非類似化率は、それほど大きくない。このデータをまとめると、つぎの表3-2のとおりである。語中に長音Rが挿入されても、称呼が非類似化される可能性は低いと結論せざるを得ない。

表3-2 長音Rの語中への挿入に伴うモーラ数の増加と非類似化率の関係

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
2→3	□R□	18	19	51%
3→4	□R□□	31	15	33%
	□□R□	13	4	24%①
4→5	□R□□□	12	7	37%②
	□□R□□	8	1	11%③
	□□□R□	19	7	27%④
5→6	□R□□□□	2	2	50%⑤

この表は、下記のことを示している。

- ・モーラ数が増加するにつれ、つまり称呼が長くなるにつれ、長音挿入の影響が薄れて、非類似になる場合が減って類似とされる率が高くなる。
- ・しかし、①と②では逆転していて、3→4拍よりも4→5拍の方が、非類似化率が高い。語頭音が長音化するとその影響は大きく、非類似とする方向にバランスが傾くといえる。⑤は事例が少ないので決定的なことはいえないが、④との間でも同じことが起こっている可能性がある。

- ・③と④の値の変化にも意味がありそうである。④においては、語頭の□□が1フットを形成してひとまとまりのリズムを刻んだ後に長音が挿入されたため、語頭の挿入と同様、②に次いで非類似の割合が高まったものと解される。

2.2 長音Rの語尾への付加

長音Rが語尾に付加した場合の類否は、表3-3にみるとおりであって、語中に挿入された場合とは対照的に、非類似となる度合が低く、類似が圧倒的である。

表3-3 長音Rの語尾への付加 (1/3)

モーラ数	類 似			非類似		
	商標 A	類 否	商標 B	商標 A	類 否	商標 B
1→2 2拍目 □ ↓ □R	ム	=	ムー			
2→3 3拍目 □□ ↓ □□R	アガ アミ エコ エバ ココ ジュジュ スパ セラ トミ チボ ナビ バギ バブ バリ ハロ ビノ	=	アガー アミー エコー エパー ココー ジュジュー スパー セラー トミー チボー ナビー バギー バブー バリー ハロー ビノー	エヴァ キラ ドル ナナ ハレ	×	エヴァー キラー ドルー ナナー ハレー

表3-5 促音Qの語中への挿入

モーラ数	類似			非類似		
	商標A	類否	商標B	商標A	類否	商標B
2→3 2拍目 □□ ↓ □Q□	シュシュ バズ パズ ミチ	= = = =	シュツシュ バツズ パツズ ミツチ	ズカ チャト トト トボ ビク ポチ マド リセ リキ	× × × × × × × × ×	ズッカ チャット トット トッポ ビック ポッチ マッド リッセ リッキ
3→4 2拍目 □□□ ↓ □Q□□	トピー ラセラ ルクス ワコム	= = = =	トッピー ラッセラ ルックス ワッコム	ココロ ラシー ワコム	× × ×	コッコロ ラッシー ワッコム
3→4 3拍目 □□□ ↓ □□Q□	プロト モラド	= =	プロット モラッド	クオカ シルク バスコ ミヤコ	× × × ×	クオッカ シルック バスッコ ミヤッコ
4→5 2拍目 □□□□ ↓ □Q□□□	ケトール チャプリン ネタツプ ビットイン	= = = =	ケットール チャップリン ネッタツプ ビットイン			
4→5 3拍目 □□□□ ↓ □□Q□□	スタシー	=	スタッシー			
4→5 4拍目 □□□□ ↓ □□□Q□	ドーナツ	=	ドーナツツ			
5→6 5拍目 □□□□□ ↓ □□□□Q□	エクスジェン エクスゾル エクスナビ	= = =	エックスジェン エックスゾル エックスナビ			
6→7 2拍目 □□□□□□ ↓ □Q□□□□□	エクスパイル	=	エックスパイル			

表3-5のデータをまとめたものは、下記の表3-6となる。こ表から、つぎの傾向が読み取れる。

- ・この場合も、モーラ数が小さい領域では非類似が優勢であり、モーラ数の増大につれて、急激に促音が挿入されたことの影響が減る。
- ・事例数が少ないので、非類似化率の数字はあまり意味がないが、パターン「□□Q□」の場合に非類似

が多くなるのは、アクセントの移動によるものと思われる。

- ・パターン「□□□Q□」の場合に非類似になるのは、前記の「□□□R□」の場合と同様に、語頭の□□が1フットを形成してひとまとまりのリズムを刻んだ後に促音が挿入されるために、促音の印象が強く感じられるものと考えられる。

表3-6 促音Qの語中への挿入に伴うモーラ数の増加と非類似化率の関係

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
2→3	□Q□	4	9	69%
3→4	□Q□□	4	3	43%
	□□Q□	2	4	67%
4→5	□Q□□□	4	0	0%
	□□Q□□	1	0	0%
	□□□Q□	1	1	50%
5→6	□Q□□□□	4	0	0%
6→7	□Q□□□□□	1	0	0%

4. 撥音の加入

4. 1 撥音Nの語中への挿入

撥音Nが語中に挿入されたときのデータは、表3-7にみるとおりである。

表3-7 撥音Nの語中への挿入

モーラ数	類 似			非類似		
	商標A	類 否	商標B	商標A	類 否	商標B
2→3 2拍目 □□ ↓ □N□				ジャム ノノ パナ フェディ	× × × ×	ジャンム ノンノ パンナ フェンディ
3→4 2拍目 □□□ ↓ □N□□	サティエ	=	サンティエ	カノン ケマン サリブ モカフェ モビア ラリー ルルン	× × × × × × ×	カンノン ケンマン サンリブ モンカフェ モンビア ランリー ルルン
3→4 3拍目 □□□ ↓ □□N□				ウイズ ミラダ	× ×	ウインズ ミランダ
4→5 2拍目 □□□□ ↓ □N□□□	アロジン イトロン サラッキ セロック	= = = =	アンロジン イントロン サンラッキ センロック	アキシン アテウス シャテール	× × ×	アンキシン アンテウス シャンテール
4→5 3拍目 □□□□ ↓ □□N□□				フロティア モラボン	× ×	フロンティア モランボン
4→5 4拍目 □□□□ ↓ □□□N□	インテロ	=	インテロン	クラリス ネクサス	× ×	クラリンス ネクサンス
5→6 2拍目 □□□□□ ↓ □N□□□□	コスタント	=	コンスタント	チトレット	×	チントレット
5→6 3拍目 □□□□□ ↓ □□N□□□	ウイザード クラスター ジョイパック ツイスター ライラック ロマティック	= = = = = =	ウインザード クランスター ジョインパック ツインスター ラインラック ロマンティック	カイトック ツイスター	× ×	カインテック ツインスター
5→6 4拍目 □□□□□ ↓ □□□N□□	アンフォティン スクラブル	= =	アンフォンティン スクランブル			
5→6 5拍目 □□□□□ ↓ □□□□N□	ウイポート	=	ウインポート			
6→7 2拍目 □□□□□□ ↓ □N□□□□□	シトラックス フォトグラファー ミトンハウス	= = =	シントラックス フォントグラファー ミントシハウス	フォトマジック	×	フォントマジック

モーラ数が少ないうちは、みな非類似である。例外的な「サティエ=サンティエ」の結論を出した理由を、審決(不服03-16361)は、つぎのように示しているが、「それ自体明瞭に聴取し難い撥音で、称呼の識別上比較的印象の薄い中間に位置することからして、全体の語調、語感が近似し彼此聴き誤るおそれがある。」

撥音を「明瞭に聴取し難い」という評価には疑問を感じる。撥音は、かなり存在を主張する要素である。

「ツイスター×ツインスター」および「フォトマジック×フォントマジック」は、観念によって区別できる。

類似と非類似の割合をみると、下記の表3-8に示すとおりである。

表3-9 撥音Nの語尾への付加 (2/2)

モーラ数	類似			非類似		
	商標A	類否	商標B	商標A	類否	商標B
	クロコ	=	クロコン	トーネ	×	トーネン
	ストロ	=	ストロン	ドンド	×	ドンドン
	サンキ	=	サンキン	ナタリ	×	ナタリン
	ジュリア	=	ジュリアン	ノンノ	×	ノンノン
	シルラ	=	シルラン	ノルマ	×	ノルマン
	セルバ	=	セルバン	ピコティ	×	ピコティン
	ソフィア	=	ソフィアン	ベリジ	×	ベリジン
	ソリア	=	ソリアン	マイラ	×	マイラン
	タウロ	=	タウロン	メトロ	×	メトロン
	タフコ	=	タフコン	ヤマハ	×	ヤマハン
	タフト	=	タフトン	リバティ	×	リバティン
	チャップ	=	チャップン	リプロ	×	リブロン
	デルフィ	=	デルフィン			

表3-9の傾向をまとめれば、表3-10のとおりである。

表3-10 撥音Nの語尾への付加に伴うモーラ数の増加と非類似化率の関係

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
2→3	□□N	16	10	38%
3→4	□□□N	49	29	38%
4→5	□□□□N	15	5	25%
5→6	□□□□□N	7	0	0%
6→7	□□□□□□N	2	0	0%

撥音Nが語尾に付加したときの影響は、つぎのようにまとめることができる。

- ・長音にくらべれば、撥音の付加は、称呼を非類似にする力が強く、その影響は、少なくともモーラ数の小さい領域では大きい。
- ・しかし、語尾への付加は、語中に挿入された場合ほど、影響が顕著でない。

5. 特殊拍の交替

類否が問題になる称呼の間で、3種の特殊拍のうち二つが相互に入れ替わった形態のものが、しばしば見受けられる。そのような関係がみられるとき、モーラ数には変動がないが、称呼の類否が影響を受けることは十分に考えられる。

特殊拍の交替は、3個のものから2個をとる組み合わせであるから、

長音と促音の間

長音と撥音の間および

促音と撥音の間

の3種の場合がある。一部の方言を別にすれば、促音は語中でしか存在し得ないから、促音が関与する特殊拍の交替は、称呼の語中で起こるものに限られる。長音および撥音は、語中のほかに語尾にも存在し得るから、長音と撥音の交替に関しては、その起こる位置が語中と語尾との2種あることになる。

6. 長音と促音の交替

称呼の語中において、長音と促音が交代した場合のデータは、表3-11に示すとおりである。

表3-11 特殊拍の交替—語中における長音Rと促音Q

モーラ数	類似			非類似		
	商標A（長音）	類否	商標B（促音）	商標A（長音）	類否	商標B（促音）
3 2拍目 ↓ □W□	カーシ ナーク	= = =	カッシ ナック	ピーク ローテ ケート ズーカ ブーカ	× × × × ×	ピック ロッテ ケット ズッカ ブッカ
4 2拍目 ↓ □W□□	マーキー	=	マッキー	マークス ルーキー ビックス トーキン	× × × ×	マックス ルッキー ビックス トッキン
4 3拍目 ↓ □□W□	サラート ハローズ ジャリート アビーク ルリード	= = = = =	サラット ハロッツ ジャリット アビック ルリッド	アシード イマーク ルシード スパート	× × × ×	アシッド イマック ルシッド スパット
5 2拍目 ↓ □W□□□	トープラン	=	トッبران			
5 3拍目 ↓ □□W□□	クリークス ウオーティ	= =	クリックス ウオッティ			
5 4拍目 ↓ □□□W□	エポメート アニマト サンポート アドパーク サンポート エスタート エスポート ヴェルサート ヒザラーク コシラーク	= = = = = = = = = = =	エポメット アニマット サンポット アドバック サンポット エスタット エスポット ヴェルサット ヒザラック コシラック	アトピーク プロモード アドパーク トキメック アスコート マイコート ユニパート	× × × × × × ×	アトピック プロモッド アドバック トキメック アスコット マイコット ユニパット
6 2拍目 ↓ □W□□□□	パークエース パートニュース	= =	バックエース パットニュース	ヒートガード	×	ヒットガード
6 3拍目 ↓ □□W□□□	スニーカーズ	=	スニッカーズ			
6 4拍目 ↓ □□□W□□	ノントークス	=	ノントックス			
6 5拍目 ↓ □□□□W□	バイオコート ファブリカート	= =	バイオコット ファブリカット	バイオメート スピーディーブ クールコート ディジテック	× × × ×	バイオメット スピーディップ クールコット ディジテック
7 2拍目 ↓ □W□□□□□				ビートウエーブ	×	ビットウエーブ
7 5拍目 ↓ □□□□W□□				ネットマークス	×	ネットマックス
7 6拍目 ↓ □□□□□W□	ビジネスパーク クイックパーク	= =	ビジネスバック クイックバック	ハッピーフィート ネットマークス スマートポート	× × ×	ハッピーフィット ネットマックス スマートポット
8 7拍目 ↓ □・・・・□W□	メモリアルハート	=	メモリアルハット			
9 2拍目 ↓ □W□・・・・□				ビートレボリューション	×	ビットレボリューション

表3-11をまとめると、表3-12のようになる。

表3-12

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
3	□ [R→Q] □	2	5	67%
4	□ [R→Q] □□	1	4	80%
	□□ [R→Q] □	5	4	56%
5	□ [R→Q] □□□	1	0	0%
	□□ [R→Q] □□	2	0	0%
	□□□ [R→Q] □	10	7	59%
6	□ [R→Q] □□□□	2	1	33%
	□□ [R→Q] □□□	1	0	0%
	□□□ [R→Q] □□	1	0	0%
	□□□□ [R→Q] □	2	4	67%
7	□ [R→Q] □□□□□	0	1	100%
	□□□□ [R→Q] □□	0	1	100%
	□□□□□ [R→Q] □	2	3	60%
8	□□□□□□ [R→Q] □	1	0	0%
9	□ [R→Q] □□□□□□□	0	1	100%

称呼の語中で長音と促音が交替した場合、それが称呼の類否に与える影響は、つぎのようにまとめることができる。

- ・事例は多くないが、全体で 30 : 31 であるから、ほぼ半数が非類似になるといえる。
- ・モーラ数の小さい領域で非類似になる度が高く、その程度は、単純に撥音が語中に挿入された場合に近い。

・モーラ数が増した領域で、かえって非類似の例が増えているが、この理由はわからない。

7 長音と撥音の交替

7.1 語中における長音と撥音の交替

称呼の語中で、[長音と撥音]の交代が起こった場合、類否がどのような影響は、表3-13に示したとおりである。

表3-13 特殊拍の交替—語中における長音Rと撥音N (1/2)

モーラ数	類 似			非類似		
	商標 A (長音)	類 否	商標 B (撥音)	商標 A (長音)	類 否	商標 B (撥音)
3 ↓ □X□				ローテ マーボ	× ×	ロンテ マンボ
4 ↓ □X□□	アーガス	=	アンガス	ターサン コーケン ラーバン タータン イーカラ コーメン	× × × × × ×	タンサ コンケン ランバン タンタン インカラ コンメン
5 ↓ □X□□□	ガーパック コートロン ビーテクト ビーテック	= = = =	ガンパック コントロン ピンテクト ピンテック	サーフィット スターガード	× ×	サンフィット スタンガード
5 ↓ □□X□□	マリジョイ	=	マリンジョイ	スパークー	×	スパンキー
5 ↓ □□X□	ピラボーグ	=	ピラボング	マイバード アリアース	×	マイバンド アリアンス
6 ↓ □X□□□□	サーマックス スパークー	= =	サンマックス スパンライフ			
6 ↓ □□X□□□	フローテック	=	フロンテック			

表3-13 特殊拍の交替—語中における長音Rと撥音N（2/2）

モーラ数	類似			非類似		
	商標A（長音）	類否	商標B（撥音）	商標A（長音）	類否	商標B（撥音）
6 4拍目 ↓ □□□X□□				ドキュメーター	×	ドキュメンター
6 5拍目 ↓ □□□□X□	キャトルロード	=	キャトルロンド			
7 2拍目 ↓ □X□□□□□	イースタバック	=	インスタバック			
7 3拍目 ↓ □□□X□□□□				フロートウォール	×	フロントウォール

モーラ数が少ない段階でも類似と判断した「アーガス＝アンガス」の件においては、審決（不服10-9394）は、その理由をつぎのように説明している。「『ン』の音は弱音で聴取し難く、長音（-）は前の『ア』の音に吸収され聴取されがたい音であるから、差異を明瞭に聞き分け難く、互いに相紛れるおそれがあるものと判断するのが相当」

- ・語中における長音と撥音の交替は、思ったよりも事例が少ない。全体で、類似：非類似＝9：17であるから、非類似化率が65%となる。
- ・モーラ数が小さい領域では、非類似になる度合いがきわめて高い。これは、長音と促音の交代の場合と同様である。
- ・モーラ数が増した領域でも、非類似の例があるが、この理由は、おそらく（明確なものではないが）観念が作用しているものと思われる。

表3-13をまとめたのが、下記の表3-14である。

表3-14 語中において長音Rと撥音Nが交代したときのモーラ数と非類似化率の関係

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
3	□ [R→N] □	0	2	100%
4	□ [R→N] □□	1	6	86%
5	□ [R→N] □□□	4	2	全体で 83%
	□□ [R→N] □□	1	1	
	□□□ [R→N] □	1	2	
6	□ [R→N] □□□□	1	0	全体で 75%
	□□ [R→N] □□□	0	1	
	□□□ [R→N] □□	0	1	
	□□□□ [R→N] □	0	1	
7	□ [R→N] □□□□□	1	0	全体で 50%
	□□ [R→N] □□□□	0	1	

7.2 語尾における長音と撥音の交替

称呼の語尾において「長音と撥音」の交替が起こっ

た場合、それが類否に与える影響は、表3-15に示したとおりである。

表3-15 特殊拍の交替—語尾における長音Rと撥音N（1/2）

モーラ数	類似			非類似		
	商標A（長音）	類否	商標B（撥音）	商標A（長音）	類否	商標B（撥音）
3 ↓ □□Y	アミー ポリー タロー	= = =	アミン ポリン タロン	ワコー	×	ワコン
4 ↓ □□□Y	ベルマー サンデー ルージー	= = =	ベルマン サンデン ルージン	ランバー ラクサー リパティール	×	ランバン ラクサン リパティン

傾向をまとめたものが、下記の表3-18である。

表3-18 語中において促音Qと撥音Nが交替した場合のモーラ数と非類似化率の関係

モーラ数	パターン	類似	非類似	非類似化率
4	□ [Q→N] □□	2	3	60%
	□□ [Q→N] □	2	2	50%
5	□ [Q→N] □□□	0	1	全体で 50%
	□□ [Q→N] □□	2	2	
	□□□ [Q→N] □	1	0	
6	□□□□ [Q→N] □	1	0	0%

・全体で8:8と、類似と非類似と半分ずつ。事例が少ないので傾向がつかめないが、非類似になった例が結構あることから、促音と撥音の交替が称呼に与える印象のちがいは、やはり大きいといえる。

9. この章のまとめ

9. 1 3種の特殊拍の加入に共通のこと

(1) 特殊拍の加入により称呼のモーラ数が増加することが類否判断に与える影響、具体的には類似を非類似に転換させる力は、

2拍→3拍ないし3拍→4拍

までの、モーラ数が少ないうちに限られ、それよ

り長くなると、影響力が失われる。

(2) 特殊拍がその存在を發揮する程度は、
撥音 N > 促音 Q > 長音 R

の順である。

(3) 類否の結論には、観念の有無が大きな影響を与え、対比する称呼の少なくとも一方に明確な観念がある場合は、非類似の結論が出やすい。

(4) 平成1～20年を前半の1～10年と後半の11～20年とに分けて観察すると、下記の表3-19に示すように、前半期より後半期の方が、特殊拍の加入により非類似となる度合が高まったという傾向がある。

表3-19 特殊拍の加入が称呼の非類似化率に与える影響の審決時期による違い

	長音 R の加入・付加	促音 Q の加入	撥音 N の加入・付加
平成前半期	8%	15%	20%
後半期	28%	46%	52%
通期	23%	30%	37%

表3-19にみる変化の大きさは、

長音 R > 促音 Q > 撥音 N

の順であって、上記した3種の特殊拍が称呼を非類似にする影響力の順と逆である。影響が小さかったものほど、影響力が増大したことが目立って見える、ということになる。

影響が大きいことがわかる。一方、3拍→4拍以降では、あまり聞き分けられず、類似となる。

(3) 語中への長音の挿入により4拍→5拍となる場合、パターンによって様子が異なり、

2拍目が長音 □R□□□ の場合
類似：非類似=12：7 類似の率 63%

3拍目が長音 □□R□□ の場合
類似：非類似=8：1 89%

4拍目が長音 □□□R□ の場合
類似：非類似=19：7 73%

となる。2拍目または4拍目が長音の場合の、□R. □□. □または□□. □R. □は、長音の加入が受け入れやすいが、3拍目が長音の場合の、□. □R. □□は受け入れにくく、Rを無視（短

9. 2 長音 R の加入に固有のこと

(1) 長音の語尾への付加は、モーラ数の小さい領域でも、ほとんど称呼を非類似にしない。

(2) 一方、語中への挿入は、少なくともモーラ数の小さい領域では、かなり非類似に転換させる力があり、2拍→3拍（つまり語頭の音節の長音化）では約半分が非類似となり、語頭における長音化は

縮化)する方向で受け止められるのではないかと考える。

(4) 2拍→3拍, 3拍→4拍, 4拍→5拍 の場合について, 長音 R の存在が, 語中と語尾とで類否に

どのような影響を与えるかをみると, 下記の表3-20のとおりである。前記したように, 語尾における長音の付加は影響力が低く, 称呼はほとんど非類似のまま止まることが明らかである。

表3-20 モーラ数の変化と長音の加入が非類似化率に与える影響の位置による違い

	語中 類似：非類似 (非類似化率)	語尾 類似：非類似 (非類似化率)
2拍→3拍	18：19 (51%)	30：5 (14%)
3拍→4拍	44：19 (30%)	50：5 (10%)
4拍→5拍	39：15 (28%)	14：0 (0%)

9.3 促音の加入に固有のこと

促音の挿入の影響は, モーラ数が小さい領域においては顕著で, 2拍→3拍では非類似の率が70%に達するが, 影響はモーラ数の増加につれて急激に弱まり, 4拍→5拍では実質上なくなる。

9.4 撥音の加入に固有のこと

(1) 撥音の加入は, 最も影響力が大きい。語中に挿入された場合, 2拍→3拍はすべての事例が非類似であり, 3拍→4拍でもほとんど非類似となる(類似：非類似=9：1)。4拍→5拍でようやく伯仲し(5：7), 5拍→6拍で類似が優勢(10：3)となる。

(2) モーラ数が大きい領域(6, 7)においても, 2拍目に撥音が挿入されたときは, 非類似になる事例がある。

(3) 撥音 N が語尾に付加された場合は, 語中に挿入された場合にくらべて, 非類似となる割合が低くなる。この違いは, 語中への撥音 N の加入が, 語のリズムおよび(または)アクセントに影響を与えて, 非類似となる割合を高くするのに対し, 語尾への撥音 N の付加は, そのような影響がないことに起因すると考えられる。この傾向は長音と同様である。

9.5 特殊拍が交替した場合

特殊拍の交替が称呼を非類似にする影響力は, つぎの順序と程度である。

- 高い(おおよそ2/3)：語中における長音と撥音
- 中位(おおよそ1/2)：語中における長音と促音／語中における促音と撥音
- 低い(おおよそ1/3)：語尾における長音と撥音

(原稿受領2012.2.1)

